

父ミカエルの秘密

キルケゴールの生涯には多くの秘密がある。しかしそれらの秘密の源には、彼の父ミカエルの秘密があったと言っても決して過言ではない。つまり、秘密は二重になっているのだ。

ミカエルは貧しい農家の 9 人兄弟の 4 番目で、幼い時から荒野で労働をさせられていた。デンマークの冬は寒く、暗い。そんな冬の日、彼は荒野の中で羊の番をしていた。彼は、あまりの寒さと空腹、そしてあまりの孤独に耐えかねて、岩の上に登って天を仰ぎ、「神は自分のような子供をこれほどまでに苦しめるのか、それなら自分は主なる神を呪う」と叫んだ。この恐ろしい叫びは、少年の敬虔な信仰心に突き刺さった。彼は、罪の中の罪、絶対に許されざる罪としての「聖霊に逆らう罪」を犯したと信じ、神に対する恐れとおののきを生涯感じ続けることになった。しかし、神は罰を与えるどころか、思いもよらぬ恵みを与えた。ミカエルはその後コペンハーゲンに出て、毛織物商人として成功を治め、大きな富を築くことができたのである。

最初の不幸は、結婚後まもない妻が亡くなったことから始まる。彼は 1 年後、家付きの小間使いの女性と結婚したが、そのとき彼女はすでに妊娠していた（この結婚がミカエルにさらなる罪責感を覚えさせた）。夫婦はその後 7 人の子供たちに恵まれ、セーレン・キルケゴールはその末子であった。しかし、セーレンが幼い頃、1 人の姉と 1 人の兄が亡くなった。彼が大学生になった頃、今度はわずか 2 年余りのうちに姉や兄たち合わせて 3 人が次々に死に、そして母親も亡くなった。こうして、キルケゴール家から 7 人の死者が出たのである。しかも、子供たちは幼くして、あるいはキリストの死んだ 33 歳にならない前に、いずれも異様な仕方で死んでいる。子供たちで残されたのは、長男ペーダーと末子セーレンの 2 人だけであった。

「大地震」と「レギーネ事件」

ミカエルは、この 2 人も 33 歳にならない前に死んでしまい、最後に自分だけが孤独の内にたった 1 人残されるだろうと確信した。これが「聖霊に逆らう罪」を犯した神の罰なのだ。セーレンはある夜、父が恐ろしい絶望の声を上げたのを聞いたという。そのような父の秘密をつぶさに知ってしまったことを、彼は手記の中で「大地震」に喩えている。ミカエルは生き残った息子たちに、自らの罪を贖い、神にとりなしをしてもらうべく、牧師になることを強く求めた。

長男ペーダーは、父の言いつけどおり神学試験を受けて牧師になった。しかしセーレンはこれに肯んじ得ず、放蕩三昧に陥った。大学でも神学ではなく文学の研究に没頭した。やがて、彼はレギーネという名の少女に恋することになる。彼女を通じて内なる詩人が目覚めることとなった。彼は人間的な愛を享受したいと切望し、3 年間の恋愛の後、婚約するに至った。しかし、そのとき彼は初めて気が付いたのである。自分は父を通じて幼い内から、すでに神と婚約していた for-lovet ことを。しかも、この神との婚約は、絶対に取り消すことができないことを。彼はレギーネとの婚約を後悔し、彼女に婚約指輪を送り返した。これが「レギーネ事件」と呼ばれるものである。

不可解だが、これが事実

この一連の事態は、少し考えてみれば不可解なことがたくさんある。何と言ってもキリスト教の神は愛の神ではなかったの

か？ キルケゴールは神の愛に生きつつ、レギーネとの人間的愛を育む道をなぜ選ぶことができなかつたのか？ たとえ神の愛と人間の愛に絶対的差異があるにしても、神が人間的愛を拒む理由はありえない。キルケゴールがこんな決断をした理由は、彼があまりに父親の思いに精神的に呪縛されていたからではないか。自らが犯した罪の贖いをするために、息子に牧師になれと命じるのは、一種のスピリチュアル・アビューズ（心霊的虐待）である。子供がノイローゼに陥り、自暴自棄になったりしても、決しておかしくはない。現代社会の良識からすれば、まったく手前勝手な宗教教育であるとも言える。

さらに遡って言うならば、父ミカエルからして、少年の頃「神を呪ったから」といって、どうして神が彼に恐ろしい罰をもたらすなどと信じなければならなかつたのか？ まったくもって不可解なことだらけである。しかし、彼らはそう信じて生きていたのであり、我々もそれを厳粛な事実として受け取るしかない。

金光大神の例

もし日本で似た例を挙げるとしたら、金光教の教祖である金光大神の原体験がそうであろう。金光大神は俗名を赤沢文治と言ひ、備中浅口郡（岡山県浅口市）で自作農を営む平凡な農夫であった。彼は養子に出されたが、養家先で生まれた義弟と養父を相次いで失った。そして彼自身の結婚後、わずか 10 年ばかりの間に不幸が次々と襲う。長男、長女、次男、と 3 人の子供が相次いで早世し、2 頭の飼牛も死んでしまった（牛は当時の農家では家族同様の存在であった）。まさに金神七殺を地で行くかのように、「十七年の間に七墓築かした」（『金光大神御覚書』）のである。こうした不幸続きの原因は、彼が方位や日柄の禁忌を犯して自宅の改築を行ったため、金神が祟ったからだと考えた。キルケゴール家と同じく、7 つの墓を作った文治の悲痛は、余人には計り知れないものがあつた。

やがて彼自身も病の床に臥して瀕死の状態に陥ってしまう。そんな時、実弟の香取繁右衛門に金神の神がかりがあつたことを契機に、文治もまた金神の声を聞くことになった。しかし文治に降りたこの神は、もはや単なる禁忌と祟りの金神ではなかつた。人間が一心に頼めば、信心によりおかげを与える天地金乃神だつたのである。ここに、祟りの神から慈悲の神への転換、より正確に言えば救済神の新たな誕生を見ることもできるだろう。文治は、やがて自宅を神の取り次ぎ場所（広前）として、寄り来る村人たちに天地金乃神の言葉を取り次ぐことになった。これが金光教の始まりである。

万人向けでない生涯、万人に向けられた果実

キルケゴール家や金光大神の一家に降りかかつた運命は恐ろしいものだった。しかし、彼らは運命に押しつぶされることなく、自らの宗教的信仰を徹底させることを通じて、その不幸の意味を逆転させることができた。キルケゴールや金光大神の生涯は絶対に万人向けではない。それはある意味で卓越した単独者 den Enkelte の生涯である。しかし、その苦悩と絶望の中から生み出された果実は、万人のために見事に実つたのである。赤沢文治は、金光教祖として多くの人々を救いに導くことができた。キルケゴールの場合は、その天才的な才能を通じて、我々に内なる信仰を覚醒させる著作を数多く書き残してくれた。そして、これらの著作は、実は我々の誰もが皆、単独者であることに気づかせる「間接伝達」の役割を果たすものなのである。